



〈研究〉銀行ナル名辭ノ由来ニ就テ(10)

武藤, 長藏

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 25(6):933-958

(Issue Date)

1918-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052974>



研究

銀行ナル名辭ノ由來ニ就テ (其十)

長崎高等商業學校教授

商學士 武藤 長藏

十六

「銀行」ナル名辭ノ語源ヲ究メンガ爲メニ予ハ種々ノ辭書古キ書物ヲ探查セリ。予ハ先ヅ物集氏ノ廣文庫第六冊所載銀行(ぎんかう)ヲ檢セシニ、伊東長胤ノ名物六帖ニ人品箋三中ヨリ楊升庵集中ノ金銀行ニ關係アル次ノ句ヲ孫引シアルヲ見タリ。

吳泰伯祠在閩門之東、每春秋市人相率性醴多圖善焉、綵與美女以獻之時、金銀行以輕綃畫侍婢捧胡琴、以從其電勝於舊繪者、名爲「牌兒」。

此名物六帖ヨリ楊升庵集ノ金銀行ニ關スル句ヲ孫引スル事ハ物集氏ノ廣文庫ニ於テハジメテ試ミラレシニ非ズシテ、コレヨリ先ニ蒲野道明氏著(明治四十一年出版)故事成語大辭典中ニモ楊升庵集ニ此「金銀行」ノ語アル事ヲ一言セリ。

又蘆洲池田四郎次郎氏著故事熟語大辭典(明治三十一年出版)ニハ楊升庵集中ノ吳泰伯祠在閩門之東以下ノ

句ヲ引用セリ。

(註) 簡野道明氏著故事成語大辭典ニ記シアル處ニヨレバ

銀行ニ兩替店ナリ行ハ行列ノ義ヨリ轉ジテ舖店ノ義ニ用フ書籍行(書籍店)古董行(骨董店)等ノ如シ楊升庵集ニ「金銀行」ノ語アリ

トアリ。又蘆洲池田四郎次郎氏著故事熟語大辭典ニハ左ノ如ク記載アリ

銀行(俗)(意義)行ハ行列ノ意ヨリ肆店ノ義ニ轉用セシナリ銀行ハ即チ兩替店ナリ又古董行ハ骨董店ナリ書籍行ハ書籍店ナリ(出處)楊升庵集ニ吳泰伯祠在闔門之東每春秋市人相率性體多圖善馬縵與美女以獻之時金銀行以輕綃葦侍婢捧胡琴以從其寃勝於舊繪者一名爲勝兒

サレバ楊升庵集中「金銀行」ナル語ヲ名物六帖ヨリ孫引スル事ハ珍シカラザル事也。

サテ予ハ先ツ順序トシテ伊東長胤ノ名物六帖人事箋ヲ參考スル事ヲ思立チシガ當時我長崎高商圖書館ハ勿論長崎縣立圖書館其他各學校圖書室其他私人ノコレヲ所持スルモノアルヲ聞カズ、幸ニ京都ノ書店ノ之ヲ所持スルヲ知リコレヲ我校ノ爲メニ取寄セタリ。東京京都等ニアリテハコレヲ所持スルモノ公私圖書館又コレヲ所持スル學者藏書家少ナカラザルベシ。然ルニ長崎ニ於テハ事情全ク異ナルモノアリ有名ニシテ珍シカラザル伊藤長胤ノ名物六帖ニ於テスラ既ニ然リ、況ンヤ他ノ珍書ニ於テヲヤ。(尤モ長崎ニハ特有ノ歴史的事情ヨリ)予ハ研究上ノ不便大ナル予ノ境遇ニ就テ自ラ感慨ニ堪ヘズ時ニ思ハズカ、ル言ヲナス事アリ讀者幸ニ之ヲ諒トセラレヨ。サテ予ガ京都ヨリ取寄セ今使用シツ、アルハ伊東長胤纂輯門人奥田士亨平安(京都)奎文館發行名物六帖ハ寶曆乙亥(寶曆五年即チ西曆一七五五年)新鐫釋刻必究トアル版本也而シテ其人品箋三凡九門○賈僧典當ノ部ニ

- (1) 金銀行 リヨウガヘヤ
- (2) 金銀行 キンギンサイトシヨリ
- (3) 書籍行 シヨモツヤ
- (4) 棉花布行 モメンヤ
- (5) 古董行 フルダウダヤ
- (6) 舖行 ミセワリ
- (7) 行家 ミセワリ
- (8) 牙行 スワイ

等ノ名辭アリ。

而シテ又予ガ京都ヨリ取寄セタル寫本名物六帖宮室箋上凡十門ノ内第七門タル「市肆店鋪」ト題スル内ニ兌銀鋪（リョウガヘヤ、ゼニカヘミセ）、兌換時錢鋪（リョウガヘヤ）（清明上河圖）銀鋪（居家旅店名立行老察知物聲名目）銀店等ノ名辭ヲ載ス。

伊東長胤纂輯名物六帖ノ收錄スル處ニヨレバ

金銀行（リョウガヘヤ） 楊升庵集 吳泰伯祠在閭門之東（ニ） 母春秋市人相率性體多圖（メ） 善鳥綵與美女（ヲ） 以獻之時（ヲ）（金銀行）以輕綃畫侍婢

捧胡琴（ヲ） 以從其寬勝（ル） 於舊籍者（ヲ） 名爲勝兒（ト）

金銀行（キンギンサノトシヨリ） 侍兒小名錄 事與上所載升庵集同

楊升庵集ノ著者ハ明ノ楊慎也コノ事ハ前々號ニモ一言シ置ケリ

却說伊藤長胤纂輯ノ名物六帖ヲハジメトシテ現代ノ著者物集博士ノ廣文庫及池田氏簡野氏等ノ辭書等ニスベテ引用スル「吳泰伯祠在閭門之東」云々ノ語ハ果シテ明ノ楊慎ガ著楊升庵集中ニアル句ナルヤ否ヤ一應書物ニ就テ調べザレバ正否確ナラズ、然ルニ楊升庵集ハ予之ヲ本年正月東京上野帝國圖書館ニテ一覽セシガ大冊ニテ右引用サレシ箇所ハ予ノ如キ門外漢ノ容易ニ探出ス能ハズ、故ニ予ハ京都文科大學教授文學博士狩野直喜先生ノ教ヲ仰グ事トセリ。

狩野博士ヨリハ前後二回ノ答書ヲ得タリ、第二回ノ答書ハ予ガ第一回ノ答書ニ基キ草シタル拙稿ノ校閱ヲ乞ヒタルニ對シテ予ニ寄セラレタルモノ予ハ今一々狩野先生ノ承諾ヲ得ルノ暇ナク失禮ヲ顧ミズ左ニ第二回ノ答書ノ一節ヲ引用セントス。

次ニ予ハ伊藤長胤ノ名物六帖ニ引用スル侍兒小名錄ト其著者ニ就テモ前述ノ明ノ楊慎ノ楊升庵集ト同ジク狩野博士ノ教ヲ仰グ事トセシニソレニ對シテモ前後二回ノ答書ヲ得タリ第二回ノ答書ハ前述ノ明ノ楊慎ノ楊升庵集ニ就テノソレト同時ニ答ヘラレシモノニテ互ニ關聯スル處アレバ同時ニ左ニ引用セントス。

狩野博士ノ答書ニ曰ク(但シ一、二、三、ノ番號ハ予ノ附セシ處也)

一、明ノ楊慎ガ「吳泰伯祠在闔門之東」云々ノ語ハ考證的ノモノナレバ大抵升庵外集ナドニアレベシト御答致シタリ。其後余ノ藏書外集ヲ檢ベタルニ上記ノ條ナシ。余ノ外集ハ寫本ナレバ抄寫ノトキ脱シタルヤモ知レザレド、兎モ角見當ラズ。依ツテ函海ニ收メタル楊慎ノ著者麗情集一卷ヲ査シ其内ニ名物六帖ニアルモノト同ジ文句アルヲ知レリ。

二、予ガ侍兒小名錄ノ著者ヲ宋ノ洪适トセシハ四庫全書總目提要(同書卷一百三十七)ノ說ニ從ヒタルナリ。

(附註) 武藤曰ク狩野博士ハ第一信中ニ侍兒小名錄ノ著者トシテ傳ヘラル、宋洪适(政和七年生淳熙十一年卒1171-1184.A.D.)ノ名ヲ示サレタリ。

三、予ハ侍兒小名錄及ビ之レニ關聯シタル書ニツキ所有本文ヲ集メテ研究シタルニハアラズ。サレド予ノ寡聞ニヨレバ貴兄ガ論文ニ引用サレントスル上記ノ文ハ宋ノ溫豫ガ物シタル續補侍兒小名錄ニ見ユ。(予ハ叢書稗海本ニヨル。說郭本ニハ此條ナシ)其文ハ楊慎ガ麗情集ニ記スルモノト大體ニ於テ變リナシ。唯文句ニ少異同アリテコノ方意味分リ易シ。御參考マデニ其文ヲ學グベシ。

吳太伯祠在東闔門之西。每春秋季。市肆相率合牢醢。^{△△△△△△△△△△}祈福于三讓王。^{△△△△△△△△△△}多圖善馬綵轡口女以獻之時乙丑春有金銀行首糾合其徒以

輕繪畫美人侍婢捧胡琴以從。其貌出於舊繪者。名美人爲勝兒。(△ハ楊慎ノ文ニナキモノ。——ハ楊慎ノ文ト續補侍兒小名錄ト異ナルモノ)

予ノ考ニテハ楊慎ハ之レヲ續補侍小名錄ニ採リタラント思フ。爰ニ注意スベキコトハ上記ノ文ハ唐ノ李玖(大中年代846—859 A.D.ノ人)ガ書キシ纂異記ヨリ錄シタルモノト見ユ。サレバ此書ノミニテモ金銀行首ナル語ガ唐ノ宣宗頃ニハ遅クトモ已ニ使用サレタリシコトヲ知ルニ足ラム。

(附註) 武藤曰ク予ガ東京上野帝國圖書館ニテ司書官村島文學士ノ助力ヲ得テ調べ得タル處ニヨレバ同圖書館所藏神海二十八至三十侍兒小名錄拾遺并補續全ニ收メラレタル宋曹陽溫遜著明山陰陳汝元校續補侍兒小名錄第六頁ニ記スル處前文狩野博士ガ引用サレタル吳太伯祠在東閭門之西以下全文同シ狩野博士ガ^不女ト記サレシ不明ノ文字ハ子ナル文字ニテ即チ子女ヲ意味スル事ヲ知り得タリ。

侍兒小名錄ノ書名ヲ有スル著書ハ東京上野帝國圖書館ニモ數種アリ予ハ先キニ村島文學士ヨリ報告ヲ得今夏帝國圖書館ニ於テ圖書館書籍目錄ト實際ノ書物トヲ對照シテ見ルヲ得タリ。

ソレニヨレバ

五朝小說說郛目錄百十五至百十八局第七十七ニ單ニ小名錄ナル書名ノモノモアレド、侍兒小名錄ナル書名ニテ宋ノ王銍、宋ノ溫豫、洪邁、宋張邦幾(目錄ニハ基トアレド書物ニハ幾トアリ)等アリ。何レモ内容ヲ異ニシ先ニ引用セシ如キ吳泰伯祠云々ノ文句ヲ見出サズ。(大正七年九月於東京認)

(附註) 明ノ楊慎ト其著作楊升庵集其他ニ就テ序茲ニ附記シテ彼ガ如何ナル學者ニテ又如何ナル時代ノ人ナル乎ヲ示サントス狩野博士ハ予ニ宛テ第一回ノ答書中ニ「明ノ楊慎ハ明ニテ有名ナル博覽家也併シソレ文間違タル説モ多ク前人之ヲ正シタル者多シ」ト答ヘラレタリ。

次ニ東京上野帝國圖書館司書官文學士村島晴雄氏ノ報告ニヨレバ楊升庵外集ノ序文ニハ萬曆丙辰及丁巳トアル由然ラバ我元和

二年及三年後水尾天皇ノ時代德川秀忠將軍ノ治世也西曆千六百十六年及千六百十七年也西曆千六百十六年ハ英國ニテシエキス
ヒアノ死セシ年也。

予ハ此夏期休暇鹿兒島ニ於テ此原稿ニ加筆改訂シツ、アル際第七高等學校造士館圖書室ニテ楊升菴著丹鉛總錄ヲ發見セリ。此
鹿兒島第七高等學校所藏楊升菴先生著丹鉛總錄所載卷頭ニ掲グル丹鉛總原序ニハ

嘉靖壬寅閏夏五金伏之初楊慎序

トアリ。嘉靖ハ明朝世宗ノ年號ナリ壬寅トアル故嘉靖二十一年即チ我後奈良天皇ノ御代將軍足利義晴ノ治世、西曆千五百四十
二年也。

丹鉛總錄原序ニハ嘉靖三十三年甲寅五月五日 涇南門人梁佐應台拜序トアリ。

又丹鉛總錄跋ハ乾隆乙酉之秋七月既望虎林楊昶書トアリ、乾隆乙酉ハ清朝高宗乾隆十四年即チ西曆千七百四十九年也、其跋ノ
ハジメニ曰ク

「楊升菴先生一代才人寓予著作明世宗時謫戍濱南放情歌詠流播于鸞閣羣雨閑婦人孺子羣呼爲楊狀元噫先生可謂瘁其遇而榮
其名者矣……………」

サテ以上引用セシ處ニヨリ金銀行ナル名辭ガ支那ニ於テ唐、宋又ハ明ノ時代ノ文集ニ見エ我德川
時代ノ言葉ニテ云ヘバ兩替屋ヲ意味スル事ヲ發見セリ。

然ラバ金銀行ノ金ヲ省キテ銀行ト呼ブ事文學上又ハ實際社會業務上何時ノ頃ヨリ行ハレシヤ。コ
レ次ニ研究スベキ問題也。コノ問題ヲ決スルニ當リ先ヅ予ハ山崎博士ガ其著貨幣銀行問題一班第十
編第一節『銀行ナル語ノ由來及ビ「バンク」ナル語ノ適用』ナル一文ノ附註中ニ德川時代ノ小説本「古
朽木」中ニ「銀行」^{リヤウガヘヤ}ナル文字アリトノ説ニ着目シコレヲ研究スル事トセリ。即チ次節ニ之ヲ述ベン。

十七

法學博士山崎覺次郎氏ハ其著貨幣銀行問題一班第十編第一節『銀行ナル語ノ由來及ビ「バンク」ナ

ル語ノ適用』ナル一文ノ附註③トシテ

安永五年

（第一版ニハ安政五年ト印刷サレ居ルモコハ誤植ニテ山崎博士ノ責任ニアラズ、此書ノ再版ニハ安永五年ト早速訂正サレタル由ハ本年八月九日附山崎博士ヨリ予ニ宛テラレシ私信中ニ明言サレタリ、カク此書ガ安永年間ニ出版サレ

シハ事實ナルガ山崎博士ノ右善書ノ第二版マデニ記スル如クソハ安永五年ニアラズシテ安永九年ト改ムベキモノ也ト予ハ考證ノ結果信ズルモノ也其理由ハ予之ヲ後ニ述ブベシ山崎博士ハ予ノ注意ニヨリ最近出版ノ第三版ニカク改メラレシヤ否ヤ未ダ訂正第三版ヲ見ザルガ）ニ出版セラレタル「古朽木」ト稱スル小説本ニ「紺屋町ニハ紺商ノ數尤モ多ク兩換町

故ニ確ナラズ

ニヤウガヘヤ

ニ銀行アレドモ瀬戸物町ニ陶器商ノアルニ非ズ

トノ文句アリト云フト雖モ百年後ノ「銀行」ト直接關係ナキヤ明カナリ。

ト山崎博士ハ斷定的ニ記サレシガ予ヲ以テ之ヲ見ルニ若シ眞ニ此小説古朽木ノ原本ニ「銀行」ナル語ノ用ヒラレシモノトセバ此熟語ノ徳川時代既ニ存セシ事ヲ示スモノナラズヤ。カク云フハ我國ニ於テ實際社會ニ於テ「銀行」ナル語ヲ「リヨウガヘヤ」ト讀ミシニアラズシテ此小説ノ作者ガ支那流ノ銀行ナル熟字ヲ日本流ニ「リヨウガヘ」ト讀マセシニアラズヤト予ハ一旦想像解釋シ此事ニ就テ予ハ興味ヲ感ジ兎モ角「古朽木」ノ元本ニ就テ一應山崎博士ノ云ハル、處ノ正確ナルヤ否ヤヲ確メン事ヲ思立チタリ。

予ハ第一ニ古朽木ノ出版年代及著者ニ就テ取調ベントシテ朝倉無聲著日本小説年表「讀本」安永年間ノ部（第五十三頁）ヲ檢セシニ

古 朽 木

喜 三 二 著
春 町 畫

安 永 九 年

トアルヲ發見セリ故文學博士藤岡作太郎氏遺著近代小説史第三編安永天明ノ部第三百六〇頁ニモ古

朽木五卷ノ事ヲ記ス。

然ラバ山崎博士ガ安永五年ト云ハレシハ誤ナラズヤトノ疑念ヲ生ゼシガ原本ヲ所持セザル事故斷定出來ズ故ニ不取敢東京上野帝國圖書館司書官村島文學士ニ出書シテ取調ヲ依頼セシニ次ノ如キ返事ヲ得タリ。(コハ本年夏期休暇ノ事也、予ハ本年夏期休暇京都大學教授文學博士藤井乙男氏方ニテ其所藏古朽木原本ヲハジメテ見ルヲ得、後上京シテ東京上野帝國圖書館所藏本ヲ見ルノ便ヲ得タリ) ンレニ先チ予ハ東京、京都、大阪等ノ書肆ニ出書シ古朽木ヲ買求メントセシモ遂ニ手ニ入ラザリキ)

貴翰拜誦御照會ノ「古朽木」ハ御來意ノ通り「安永九庚子歲正月二日江戸湯島切通繪双紙地本間屋西村傳兵衛版行」ト奥付ニ記載有之候ニ付安永九年ノ出版ナルコト疑ナキ次第ニ御座候

次ニ本館所藏ノ本(固ヨリ右安永九年ノ木版本)ニ就イテ山崎博士ノ引用サレタル箇所ヲ探索スルニ銀行ノ文字ナク兩替屋ト相成居申候、即チ該文ハ古朽木卷一ノ最初ノ「秩父屋與九郎成立之事」ト題スル章中ニアリ同書ノ丁付ケニ依レバ二枚目ノ表(第一枚目ハ目次ナリ)四行目ニシテ其文ハ「紺屋町には紺屋の數尤も多く兩替丁に兩替屋あれ共瀬戸物町にせと物屋のあるにあらず」ト云フアリ銀行ナル文字ナシ恐ラク山崎博士ノ思ヒ違ヒナルベシト愚考致候

右村島文學士ノ返書ニテ古朽木ガ安永九年(西曆千七百八十年)ニ出版ノ事ヲ實物ニ就テ確メ得タリ山崎博士ノ安永五年說ハ誤ナルベシト推定スルヲ得ント思ヒシガ「銀行」ナル文字ニ「リヨウガヘヤ」ト假名ヲ附セシ事ハ何カ根據アル事ナラン、山崎博士ハ中田法學博士ヨリコノ事ヲ聞カレシ様昨年末上京ノ折山崎博士及ビ中田法學博士ヨリ聞キタル事アル故兩博士ニ出書シテ問合サンカト思ヒ居ル内當長崎縣立中學校教諭水木文學士ニ會ヘリ、同君ハ種々徳川時代ノ文學書ヲ集メ居ラル、ヲ聞キシカバ若シヤ古朽木ノ持合セナキ乎ヲ水木文學士ニ問ヒシニ古朽木ノ原本ハ持合セナキモ同君ガ郷里ニ所藏ノ東京金港堂ガ會テ辭書刊行ノ目的ヲ以テ發行セシ百萬塔ノ内ニ若シヤ古朽木

ガ連載サレ居リシヤモ知レザレバ一應郷里ノ方ニ問合セ取寄スベシト水本文學士ガ親切ニ云ハル、儘ニ予ハ其好意ニ從ヒシガ幸ニモ其百萬塔第八號（明治二十四年十二月二十七日印刷出版）以下ニ朋誠堂主人喜三ニ編述ノ古朽木ノ連載サレ居ルヲ發見セラレ予ノ借覽ニ提供セラレタリ。ソレニヨレバ古朽木發端三行目ニ

『紺屋町には紺商こんやの數尤も多く兩換町りやうがへに銀行あれども瀬戸物町せじものやに陶器商のあるに非ず』ト記セリ。

依テコレヲ山崎博士ノ引用セラレシ處ト對照スレバ正シク符合ス。故ニ予ハ山崎博士又中田博士ハコレニ據ラレシモノト察セリ。

而シテ今問題ハ銀行ト記シ「りやうがへ」ト振假名ヲ附セシハ陶器商ト記シ「せとものや」ト振假名ヲ附セシト同ジク原著者朋誠堂主人喜三ニ自ラナセシ處ニアラズシテ、金港堂百萬塔編纂者（編輯人ハ中根淑トアリ）ガ近代語、銀行、又陶器商ナル名辭ヲ使用セシモノナリト信ズ。若シ然ラズトセバ其以前ニ但シ明治以後何人カガ斯ノ如キ文字ヲアテハメシモノナラン、何レニセヨ原著者朋誠堂主人喜三ニハ關與セザル處ナラン。

而シテ百萬塔ノ編輯者ハ安永九年出版ノ原本ニヨリシモノナラント予ハ想像ス。（中田法學博士ノ異説ハ後ニ紹介スベシ）其事ヲ明言セザルハ學術的ニ云ヘバ缺點ナリ此金港堂ノ百萬塔ニ收載サレタル古朽木ニモソノハジメニ著者ノ自序及戀川春町（本名倉橋格俗稱ヲ壽平小石川春日町ニ住セシ故カクノ如ク號セリ）ノ序文ヲ附スル事安永九年ノ原本ニ同ジ。

サテ百萬塔收載ノ古朽木ニ據レバ

著者朋誠堂主人喜三ノ述ベ居ル自序ハ安永五年丙申正月二日ナリソレニ戀川春町ノ序文アリ

『安永八亥ノ年極月おしつめ木が木でない日』

トアリテ其序文ノ文句中ニ

「朋誠堂に以ての外ほかの古朽木ふるきあり其意味輕かろくして桐きりの木きの如ごとしといへども又口重くちくして生木なまきのごとし生木なまきは損そんだ燃もんだと之を棚たなへ掲あげて置おくこと四五年い、彌朽よく愈い枯かて保ほく々々然しかとして以もつてななくならんと欲ほす、予朋誠堂すうせいたうの煤除すすに雇やはれ探さぐり出だして之それを書林しよりんに授さづく書林しよりん曰いはく本ほんたまかせろな、ほりたやうつたらたかんまんち、ンアイ、御代ごだいの御ごたからといふかとおもへば櫻木へんぎに變へじ花はなさく春はるの新あらた版ばんとはなりぬ

安永八亥の年おしつめ木が木で無ひ日

江戸戀川春町題

ト、コレニヨルモ安永九年ノ春出版サレシ事ヲ察スベシ即チ山崎博士ガ安永五年ト記述サレシハ誤也ト斷定シテ可ナラン、尤モ山崎博士ガ安永五年ト其著書中ニ記述サレシハ古朽木ノ原本又ハ百萬塔ニ收録サレタル古朽木ヲ自ラ讀マレシニアラズシテ法學博士中田薰氏ガ明治三十七年九月二十二日附ニテ山崎博士ニ報道サレシ處ニ基キンソレヲ信ジテ記述サレシモノナル事ハ本年八月九日附ノ山崎博士ヨリ予ニ宛テラレシ書翰又本年八月十三日附ニテ中田博士ヨリ予ニ宛テラレシ書簡ニヨリ知ルヲ得タリ。

(附錄)

予ハ今夏期休暇上京ノ途次京都ニ立寄り京都帝國大學教授文學博士藤井乙男氏ニ紹介ヲ得テ初メテ面會藤井博士ノ所持サル、古朽木ノ原本ニテ「風流巧智寄」ト表紙ニ記スル原本ヲ見タリ。ソレニヨレバ著者朋誠堂主人喜三ノ自序ハ安永五年丙申正月二日ナル事拙稿前文ニ記スル處ノ如シ、ソレニ戀川春町ノ序文アリ「安永八亥の年極月おしつめ木が木で無い日」トアリ其序文文

句ハ予ガ前文ニ示セシ百萬塔所載本ト同シナレドモ一方ニ漢字ニテ書ケルヲ他方ニハ假名ニテ書ク等同シカラズ。

史圖書刊行會出版燕石十種第一、二輯、戲作者小傳等參照)

雙木園主人編述江戸時代戯曲小説通史ニハ喜三著述三十五種ヲ掲ゲ前述ノ著作チハジメ蛭子大黒吐年過、天道大福帳等ヲモ其内ニ加ヘ居ルニ拘ラズ「古朽木」ハ其内ニ加ヘ居ラズ

喜三ノ名ハ岡崎遠光氏ノ(Dr. Tomitsu Okasaki)ノ獨文日本國民文學史(Geschichte der Japanischen Nationalliteratur)中ニモ加ヘラレ居ルヲ見ル。

以上山崎博士ニヨリ最初引用サレシ古朽木ニ就テ考證ヲ重ネシガ銀行ノ語源ニ何等關係スル處ナキヲ發見セリ。徳川時代ニ銀行ナル名辭ノ使用サレシトノ證據ハ遂ニ擧グル能ハザルニ至レリ。

十八

宮崎教授在職二十五年紀念論文集ニ收メラレタル中田法學博士ノ論文『徳川時代ノ文學ニ見エタル私法』ハ予ノ如キ門外漢ニモ非常ニ有益ニ且ツ無限ノ興味ヲ感ゼシメタリ。予ノ足ラザル教養ハ到底徳川時代ノ文學ニ見エタル兩替、銀行ニ關係アル節々ヲ充分ニ取調ブル能ハズ、又カ、ル事ハ長崎ニ於テ着手スベクモアラズ。

予ハ本誌本年一月號所載拙稿ノハジメニ山崎博士ガ其近著銀行論中ニ

『然ルニ一八六六年香港ニ於テ出版セル英華字典ハ同字ノ譯語トシテ「銀行」ヲ第一ニ置クガ故ニ明治三年福地源一郎氏ノ譯セル會社辨ノ序ニ「銀行」ナル文字アリト雖モ是レ果シテ氏ノ案出ニ係ルヤ否ヤ予ハ寧ロ英華字典ニ據レルモノト信ズルナリ何トナレバ當時我邦ノ貨幣制度ハ紊亂ヲ極メテ本位未ダ確定セズ、從テ特ニ「銀」ナル字ヲ選バ理由ナク且ツ「行」ナル文字ナ店舖ノ意義ニ用弗ルハ我國ニ於テハ甚ダ稀ナレバ也』

云々ト云ハレシ其何トナレバ以下ハ理由トナリ得ルヤ否ヤ研究ヲ要セズヤ

ト記シ置キ別ニ意見ヲ述ベ置カザリシガ、予ガ山崎博士ニ注意ヲ乞ハント欲スル處ハ同博士ノ所論亦一理アレドモ「銀」ナル文字ヲ銀 Silver ト必ズシモ解スベカラズ、「かね」Money トシテ使用サレタルモノト解セバ可ナラズヤ。人或ハ我國ハ金貨本位ナレバ銀行ニアラズシテ全行トスベシ、又金貨本位ナレド金貨ハ實際多ク通用サレズ故ニ銀行ニテ可ナリト論ズルモノアラバソハ共ニ銀行ノ銀ヲ正シク解シタルモノニアラズト予ハ信ズ。

支那語辭書ニ據ルモ銀ハ單ニ silver ヲ意味スルニ止マラズ Money ヲ意味スル事アリ予ガ先ニ引用セシ Giles, Morrison 其他ノ辭書ヲ見レバコノ事ハ明也予ガ最近久留米商業學校支那語教師高橋正二君ヨリ惠贈ヲ受ケタル An Analytical Vocabulary of the New Testament by F. W. Baller, Shanghai China Inland Mission and American Presbyterian Mission Press 1893 ヲ試ニニ檢セシニ銀 (Gin) ヲ Silver; riches; money; Wealth ト説明シ銀子ハ Silver 銀錢ハ Silver Coins 銀庫ハ treasury 稅銀ハ revenue; duties トセリ。

即チ錢ハ Copper 支那ノ重量 Mace ヲ意味スルノ外ニ Money, Wealth, property ヲ意味スル事アルハ Morrison's Chinese Dictionary ニモ記スル處ノ如シ

前ニ引用セシ F. W. Baller ノ辭書ニモ錢囊 a money bag 錢財 wealth; riches 等ノ例ヲ示セリ。
(尙英華字典ノ Wealth money, Property 等ノ部参照)

本誌本年三月號所載拙稿(三)及五月號所載拙稿(四)ニ於テ聖書ニ現ハレタル兩替屋銀行等ノ文字ニ就テノ考證中支那譯聖書ニ tables of the money-changers ヲ兌錢者之案、兌錢者之凡、又光緒二

十九年官話譯ニハ「兌換銀錢の人的棹子」トセリ(拙稿(其三)(II)支那譯聖書(C)光緒二十九年ノ官話譯ニハ「兌換銀錢的トセリ」ト記セシハ「兌換銀錢の人的棹子トセリト改ムベシ)

予ガ其後買求メタル聖書公會印發 (British and Foreign Bible Society, 1914) 官話和合新約全書

ニハ兌換銀錢の人的卓子ト譯セリ、千九百十五年聖書公會印發文理串珠新約聖書ニハ兌換錢者之凡トセシ事予ガ先ニ揭ゲタル大清光緒三十四年(西曆千九百〇八年)聖公會印發售新約聖書ト同ジ。

カク銀モ錢モ共ニ Money ヲ意味スル事アリ。然ラバ支那固有ノ Bank ヲ錢莊(又錢庄トモ記ス)ト稱スルト共ニ銀莊ト稱シ又錢舖ニ對シ銀舖ト稱スルヨリ推スモ支那語ニテ支那ノ Bank ヲ錢行ト稱スル以上ハ銀行ナル名稱ハ自然ニ生ズベシ。

銀ヲ「カネ」ト云フ意味ニ使用シタルノ例ハ我徳川時代ノ作物ニ之ヲ見ル。

銀ヲ「カネ」ト云フ意味ニ使用シタル例ハ井原西鶴(西曆千六百四十二年生、レ千六百九十三年死ス)ノ著作中世間胸算用(世間胸算用五卷ノ出版年代ハ元祿五年西鶴五十一歳ノ時也西鶴ハ其翌年元祿六年即チ西曆千六百九十三年八月歿ス享年五十二ナリキ)日本永代藏(六卷アリ出版ハ元祿元年時ニ作者ノ年齡四十七歳等ニ多ク之ヲ見ル。又

井原西鶴ノ門人北條團水(正徳元年正月享年四十九歳ニテ歿ス)著日本新永代藏ニモ多少之ヲ見ル。尙其他ニモ引證スベキモノアレド之ヲ略ス、タゞ近松門左衛門(承應二年即チ西曆千六百五十三年生、レ享保九年西曆千七百二十四年死ス)ノ作ヨリ一二ノ例ヲ示サン。

西鶴ノ世間胸算用ニアル例ヲ示サバ次ノ如シ

銀藏(大阪城本丸天守臺ノ東南二棟ノ金藏) 端銀、銀、銀箱(英華字典ニモ money) 銀儲、銀親、惡銀、裸銀(英華字典ニハlend money) 錢銀(支那ニテハ silver money 又 silver coin ナ銀錢ト云フ) 等ノ如シ

右ノ如ク銀ヲ「かね」ト讀マセタル場合ノ前後ノ文句ヲ例ヲ以テ一二示サバ左ノ如シ。

世間胸算用卷之四第四「長崎ノ餅柱」ノハジメニ

霜月晦日切に唐人船殘らず湊を出で行けば、長崎も次第に物淋しくなりぬ。しかし、此所の家業は萬唐物商の時分銀儲けして年中の貯へ一度に仕舞ひ置き貧乏の人相應に緩々と暮し萬事細に胸算用をせぬ所なり

ト説キ起シ其終リニハ

「兎角伽羅も人參も日本に稀なる物は唐にも少し。ことに銀大切と思へばこそ百千萬里の風波を凌ぎ命を銀と替へる商に上りけるにて、世に銀程人の欲しき物はないと合點いたされよと語りける。是尤と思ひ身の稼ぎに油斷なく色色の渡鳥調へて都に上りしに皆見せて仕舞ひし跡なれば一つも銀になり難く人の見付たる孔雀は未だも驕らず漸く本銀取返しぬ。是を思ふに知れた事がよしとぞ」ト結ベリ

以上ヲ以テ世間胸算用中ノ文例ヲ終リ次ニ西鶴ノ日本永代藏ヲ檢スルニ

「金銀瓦石にはおとれり」「金銀の取やり」「金銀の出所」等ノ字句アルト共ニ銀持、銀取、銀拾ひ、理銀賣、銀箱、銀のなる木銀替等ノ字句アリ

銀替ト云へば長崎高商ノ學生ニ金替ナル姓ヲ有スル學生アリ、其姓氏ノ由來ヲ問ヒシニ明ナラズ、予ハ他日其研究ヲ期スルモノナレド茲ニ附記シテ識者ノ高教ヲ仰ガントス

次ニ日本永代藏第三浪風靜ニ神通丸中ニ

錢店ノ字句アリ、コレ亦予ノ注意ナヒケリ錢店ナル字句ハ支那ニテハ今日モ行ハル、チ一言スルニ止ムベシ。

又井原西鶴ノ門人北條團水

(正徳元年正月享年四十九歳ニテ歿ス)

著日本新永代藏ヲ見ルニ「金銀を借うけ」「金銀の差

引」「金銀利足」等の字句又「金銀は世界を廻りてかならずとまる事なし」「金銀は一生のもちあそびなり」等の警句モアリテ、金銀ナル字句ヲ使用スルト共ニ銀親、銀借、銀藏等ノ字句ヲ使用シタル例アル事西鶴ニ同ジ。

西鶴ハ馬琴ト大ニ異ナレルモノアリ、又西鶴ノ文章、語法、語格正シカラズ、當字、借字ノイカガ

ハシキモノ少ナカラズ(國民文庫刊行會元
祿時代小説集參照)トノ評アリ

西鶴ノ作物ニ現ハレタル文字ヲ學術的論文ニ引用スルハ如何カト恐ルレド銀行金行ノ問題ヨリ予ノ説ヲ確メンガ爲メニ引用セントシテ思ハズ深入セリ讀者乞フ之ヲ諒トセラレヨ。

最後ニ近松ノ作中銀ヲ「かね」ト讀マセタル例ヲ示サンニ、近松門左衛門ノ忠兵衛梅川冥途ノ飛脚ニハ

『筑紫書妻の取遣も居ながら金の自由さは一分小判や白銀に翼の有が如くなり』

ナル文句アレド又

『銀の届かねのみならず手前も大分の損銀』

ノ如キ例アリ。

若シ夫レ近松門左衛門(承應二年即チ西曆千六百五十三年生
レ享保九年西曆千七百二十四年死ス)ノ國性爺後日合戰(享保二年)ノ如キ我徳川時代外

國貿易史上金銀濫出問題ニ就テ之ヲ憂フル思想ノ現ハレ居リテ文藝以外ニ研究ノ價值アリ。

我長崎ノ隠レタル篤學者畏友古賀十二郎君ハコノ事ニ就テ夙ニ着眼シ本年七月ヨリ八月七日マデ長崎新聞紙上連載ノ國性爺ノ研究中ニ其一端ヲ發表セリ。予モ亦君ト共ニコレガ研究ヲ期スルモノ也、年序一言附記ス

予カ先ニ各國語譯新約聖書ヲ引用シ例ヘバ路可傳第十九章第二十三節ヲ英譯聖書ニハ千六百十一年ノ James 第一世ノモノモ千八百八十一年ノ改譯聖書モ Bank トセシテ支那譯ニテハ光緒三十四年 (1908) 印發ノモノニモ銀行ト譯セズ大清宣統二年 (1910) 官話和合新約全書ニハ漸ク銀行ナル譯字ヲ用ヒシ事等ヲ示シ(本誌本年五月號參照)聖書ニ現ハレタル兩替屋銀行等ノ文字ヲ研究セリ。

予が聖書ヲ引用スル事ハ予ヲ知ルモノ、首肯スル處ナルベシト雖モ予が西鶴ノ作物ヲ引用スルハ意外トスル處ナルベシ予亦本文ヲ草スルニ當リ西鶴マデモ讀ミ之ヲ引用スルニ至ラントハ豫期セザリシ也。一言コ、ニ附記スル次第也。

(附記) 前ノ號ニ兩替ナル文字ノ出デシ際述ブベキ答ナリシガ書落シタル故茲ニ序附記シタキハ

兩替ナル文字ニ就テ古事類苑產業部二十三、商業三、(候訓葉中利編二十八)ニリやううか(兩替)とかけり兌字ノ意也トアル事は也。兩替ニ就テ考證スベキ事アレドモ餘白ナキ故略ス。

左ニ掲グル第一、山崎博士ノ書翰(八月九日附ニテ東京發信八)及第二、中田博士書翰(八月十三日附東京發信長崎ヨリ轉手接)中第二、ノ中田博士ノ書翰ハ雜誌掲載引用ノ許可ヲ得シガ山崎博士ノ書翰ハ最初ハ全部掲載スベキ希望ナリ居リシガ後可成掲載ヲ見合ス事ニ決シ予が最初脱稿山崎中田兩博士ノ閱覽ニ供セシ最初ノ拙稿モ山崎博士ト相談ノ結果改稿セシ次第ナルガ今改稿セシモノヲ本誌ニ寄スベキ雜誌原稿ノ切期限迫ルニ當リ私ニ考フルニ山崎博士ノ書翰ヲ全部又ハ一部省略セザル方却テ本文ノ前後ノ干係明瞭トナリ讀者ニ利益多カラント愚考シ俄ニ全文ヲ掲載スル希望ヲ抱クニ至レリ其趣ヲ山崎博士ニ通ジテ許可ヲ得寛恕ナクフ暇ナカリシガ故ニ茲ニ一言其失禮ヲ同博士ニ謝スル次第也。

第一、山崎博士ノ書翰

拜啓酷暑ノ候愈々御清適奉賀候陳バ御來示ノ玉稿正ニ拜見不相變詳密ナル御研究驚嘆ノ外無之候右ハ早速中田博士ニモ供覽仕ルベク候ヘドモ不取敢申上度ハ「古朽木」ノ出版年度ニ候拙著貨幣銀行問題第一版ニ「安政」ト有之候ハ誤植ニテ五月ノ再版ニハ安永ト訂正致置候但シ安永五年ト有之候ハ中田氏ヨリノ書狀(小生ガ問合セ候當時即チ明治三十七年九月)ニ據レルモノニテ此點ハ更ニ中田氏ニ聞合セ申スベク候拙著第一版ニ於テモ「百年後ノ銀行」ト申居候次第ニテ安政ナレバ僅ニ十數年ニ不過誤植ノコトハ明白ト存候「銀行」ナル文字ノ由來ニツキ御結論早ク承知仕度右拙著第三版ノ訂正兩三日間ニ略ホ完了候處御論文ノコトハ註ニ一寸記載致置候ヘドモ本文ハ其儘ニ致置候又御送附ノ玉稿ハ留メ置キ候テヨロシキヤ又御返送致スベキヤ御一報願上候

八月九日

乍序「銀」ニ關スル御意見甚ダ面白ク拜見仕候重テ高教ヲ仰ギ度候金銀ガ金屬ノ意味ヲ減ジテ貨幣ノ意義ニ用井ラル、コトハ非

金屬派ノ立場ヨリ見レバ看過シ難キ現象カト存候本邦ニテモ不換紙幣時代ニモ銀本位時代ニモ貨幣ノ數量ハ金……圓……錢ト申候(武藤曰クコレニ就テハ議論アレド今ハ略ス)佛蘭西ニテハ argent ハ銀ト同時ニ貨幣ノ義ナリト「Je vous 二見ヘ居ルヤウ覺ヘ候御承知ノ通り貨幣ノ語原ニツキテハ Handwörterbuch der Staatswissenschaften Pt. IV S. 561 註ニ色々ノ例ヲ舉ゲ居候。

第二、中田博士ノ書翰

拜呈陳は御送附の玉稿拜見仕候乍毎度御研究微細に入り敬服の至に候實は小生十餘年前山崎博士より銀行なる文字の出處に就きて質問を受け回答書を送り候事は記憶致候へ共手控も無之候爲め如何なる出典を引用せしや殆ど忘却致居候處右回答書は幸にも今日迄同博士の許に保存されありて本日その送附を受け初めて右は去る明治三十七年九月中の執筆なりし事並に出典中に古朽木の一節ありし事を思ひ出したる様の次第にて我ながら老毫を感申候

扱て小生が引用せし古朽木は貴説の如く百萬塔本に有之出版年代に關しては右回答中に「安永五年出版」と明記致しあり思ふに百萬塔本には出版年代を記せざる故序文に安永五年とあるに據て此年に出版ありしものと速斷したるものならん同年著作と記し置きたらんには山崎氏にも御迷惑を掛けずして相濟たらんにと今更後悔致次第に候但し同博士の貨幣銀行一班に安政五年と記しあるは全く活字の誤植にて同書第二版には訂正しある由に候へば此點に關しては小生は勿論山崎君と雖も今日に於ては最早責任を解除されたる譯にて貴下にも右訂正第二版に據て立論さるゝに至當と存候

古朽木の原版には銀行の文字は兩管となり居る由にて銀行の文字は百萬塔の出版者又は後人の改竄ならんとの貴説は一應御尤に候へ共百萬塔所收の古朽木は或は異本にて著書の初稿なるやも計り知れず畢竟は此本の系統由來を究め且つ原版と精細なる比較を爲したる上ならでは此問題も解決致し兼ねるかと思考仕候、(武藤曰ク予ハ此説ト異リタル考ナ有スル事先ニ本文ニ論ゼシ處ノ如シ京都文科大學教授文學博士藤井乙男氏其他モ予ト同意見也)明治三十七年九月二十二日附小生が山崎博士に送りし右回答書には古朽木の外猶左記の出處を記しあり候(山崎博士はその著書に、
○雜字類編(柴東讀著此本諸版あり佐村氏増訂圖書解題によれば明和六年出版が原版なるに似たり)下卷利類に

リヤウガヘヤ
銀店 銀鋪 兌銀鋪 兌換時錢鋪
リヤウガヘヤ
金銀行

○名物六帖(伊藤長胤著)第二帖(寶曆乙亥出版)人品箋三ノ二十八葉表

リヨウカヘヤ
金銀行

楊升庵集 武藤曰ク引用文ハ先ニ掲ゲシ故省略ス

金銀行首 キンギョウサイトシヨリ

侍兒小名錄 ○事與上所載升庵集同

其後小生は別に左の二文を見出申候

○文藻行潦（山本信有撰即所持本には天明二年發行とあり井上金義の序文には安永八年とあれば此書の成れるは安永八年以後なるべし）下巻幾部八物の條下に

金行楊文（楊文は楊升庵文集の略なるべし）

○官職通解（千葉玄之輯序文には安永四年とあり）二十二葉表に

金銀行首 侍兒小名錄 金銀錢座

右の中文藻行潦に見えたる金行の語は果して楊升庵文集（明楊慎の文集）に記載されありや或は名物六帖に引用せる同集の文に金錢行とあるを節略せしものなるやは原書を探索するの餘暇なき爲め斷言致兼ね候へ共兎に角に前記前文によりて金銀行又は金行なる文字が安永天明の比には學者の間に知られ兩換屋及び金銀座の兩義に解されたることは疑なき事實と存候果して然らば金行に對し銀行なる文字を兩替屋の意味に於て使用したることは有り得べき事實にてこれを以て直ちに近代の加筆と見るは速斷にあらざるかと存候

十九

支那ニ金銀行ナル名辭ガ宋又ハ明代或ハ其以前ノ文集著作ニ見エ居ル事ハ前ニ之ヲ示セリ然レドモ銀行ナル名辭ノ舊キ文集ニ存在スルヲ聞カズ、タゞ銀行ナル名辭ガ支那ニ於テ先ヅ創作サレタルモノト予ハ信ズルモノ也。

前節ニ述べタル(1)廣東ニ於ケル Bankers' guild トシテノ銀行ナル名辭(2)又英華字典ニ Bank ヲ

銀行ト譯セシ事(3)支那ニ於ケル外國銀行ノ支那名稱ニ「銀行」ナル名辭ヲ個々ノ Bank ニ就テ使用セシ事ハ不充分ナガラ既ニ幾分之ヲ明ニスルヲ得タリト雖モ其以前個々ノ錢莊銀稅ヲ銀行ト呼ビシ例又ソレト我國徳川時代「銀行」ナル用語ノ著作者ニヨリ使用サレタル形跡ヲ明ニスル能ハザルヲ遺憾トス。

以上述べ來リタル處ニヨリ明ナル如ク我國ニ於テ銀行ナル名辭ハ明治以前ノ著作法令文書ニ之ヲ發見セズト雖モ金銀行ナル名辭ハ明治二十三年印刷出版ノ勝海舟ノ吹塵錄下卷第十九冊トシテ收録サレタル故杉田玄端(大日本人名辭書ニヨレバ文化元年江戶ニ生レ明治二十二年東京ニテ死ス)譯萬國全地貨幣說中ニ予ハ最近(十一月十日)之ヲ發見セリ。

此翻譯ハ何時行ハレタルモノナル乎明確ナラズト雖モ其前ニ緒言的ニ掲ゲラレタル古錢ノ略記ナル一文ハ丁卯仲秋トアリコレ慶應三年西曆千八百六十七年ノ事ナリ。萬國全地貨幣說ト共ニ故杉田玄瑞氏ノ筆ニナルモノナルベク時期モ同ジ頃ナラン乎。

サテ此杉田玄瑞氏譯萬國全地貨幣說ハ其ハジメニ自ラ説明サレシ處ニヨレバ

「千八百四十三年刷」チードルランヅ、ハンドルスマガセイシ」第八百十五葉ヨリ「トアリ而シテ此原本ハ予ガ曾テ當地ノ古賀十二郎君ヨリ借覽シタル事アル元ハ蘭通事 *Nederlandsch Hu. delsmagazijn of Algemeen zamenvallend woordenboek voor Handel en Nijverheid, Amsterdam, 1843* ナル書物ナルヲ確メタリ。依テ再ビ同君ヨリ借覽スルニ正シク其原文ヲ發見セリ。即チ Munt, Muntwezen, Munten over Het Algemeen, Munt of Geldmunt (eng. money; fr. monnaie; du. Münze; ital. Moneta)

……トアル部分ノ翻譯ナリ。

而シテ Muntwezen ナル語ヲ金銀行ト翻譯シ、又時ニ鑄錢行ト翻譯セルヲ見ル。Bank ナル字ハ兌換鋪ト翻譯サレタリ。

此等ノ翻譯ノ正シキ乎否乎ハ別トシテ金銀行ナル名辭ノ我蘭學者ニヨリ明治以前ニ使用サレタルノ一事ハ予自身モ最近ノ發見ナルガ澁澤榮一氏ガ國立銀行創立ノ際ハ如何ナリシヤ、

予ハ當時ノ學者實際家ニ金銀行ナル名辭ノ杉田玄瑞氏以外ニ用ヒラレシヤ否ヤヲ問ハント欲ス。

予ハ昨年末上京中東京法科大學教授法學博士宮崎道三郎先生ニ初メテ面會ノ榮ヲ得テ銀行其他語源研究上ノ參考書ヲ問ヒシ事アリシガ其際同博士所藏ノ種々ナル參考書ヲ拜見セリ事物異名類編

(文久元年辛酉冬
鑄局并公履編)

飛芻輓粟、雅俗漢語譯解、侯鯖一櫛、類書纂要、等ヲ見タリ、尙其際東京夢華錄ノ如キモ參考スベキ事ヲ教ヘラレ上野帝國圖書館ヲ訪ヒシガ見ル能ハズシテ終レリ、宮崎博士ノ藏書ハ

一々ユルヽ拜見スルノ時間ナクシテ終リシガ宮崎博士ト共ニ探リ得シ處ヲ手控セシ處ニシテ誤ナ

シトセバ雅俗漢語譯解卷之下ニハ『銀兩、銀兩、銀母、銀主』ト記シアリシガ如シ

又侯鯖一櫛ニハ錢局ナル文字アリヤ。序ニ(錢局ニ就テハ臨時臺灣舊慣調查會報)
(告清國行政法第參卷第六章ニ詳也)

サレド銀行ナル名辭ヲ遂ニ見出サズシテ終レリ。

經營、交易、貿易兌換、行業、漕運、政治、會票、等ノ文字ニ就テハ種々發見スル處アリキ。

山崎博士ハ

『我國ニ於ケル銀行ナル語ハ此書(英華字典)以前ニ迴ルトキハ其徑路ヲ知ルヲ得ズ支那ニ於テモ近時ハ銀行ト稱スルモノナキニ

非ザレドモ畢竟本邦ヨリ輸入セル新語ニ他ナラズ、從來ノ銀行ニ至リテハ「錢莊」「錢舖」「銀號」「銀爐」「滙兌換」等ノ名稱ヲ以テシ自ラ銀行ト呼ブモノハ絶無ナルガ如シ」

ト云ハレシモ支那ニ於ケル銀行ナル名辭ノ由來ニ就テノ此山崎博士ノ解釋ハ訂正ヲ要スル事予ガ前ニ節ヲ追ツテ述ベ來リタル處ニヨリ明ナラン。

英華字典ニ銀行ナル譯字アリ又外國銀行ノ早クヨリ存セシ事ヨリシテ其名稱ニ就テ考ヘナバ「銀行」又ハ「金銀行」ナル名辭ノ支那ニ於テ舊キヲ知ラン。

タゞ近世歐米風ノ金融機關ノ支那ニ於ケル發達ハ我國ノ先例ニ倣フ處多ク其組織經營ノ方法ノ外ニ名稱ヲ倣フ事モ行ハレ銀行ナル稱呼ノ支那ニ廣マリシハ我國ノ影響多キハ勿論ナレドモ銀行ナル名稱ガ全然我國ヨリ逆輸入サレタルモノト解スベカラザルベシ。

否銀行ナル名辭ハ先ヅ支那ニ於テ用キラレシモノナルベシ。

予ハ尙進ンデ考證ヲ重ネ又既ニ叙述シ來リタル處ヲ顧ミテ訂正追録スルヲ要スル部分アリト雖モ餘リニ長文トナリシ故一先ヅ筆ヲ擱カントス。終リニ臨ミ謹テ先輩識者ノ叱正高教ヲ仰ガン事ヲ予ハ希フモノナルヲ一言附記セントス。

有名ナル Ebymological Dictionary ノ著者 Skent ハ其著書ノ卷頭ニ

"Labour with what zeal we will
something still remains undone."

Longfellow Birds of passage.

ナル、ロングフエローノ詩句ヲ引用セリ。予輩亦此詩句ニ對シテ感慨深矣。

追録

(一) 山崎法學博士ハ其著貨幣銀行問題一第十篇第一節中ニ西班牙語ニテ銀行ヲハ「バンカ」ト呼ブト述ベラレシモ西班牙語ニテ銀行ヲ「バンコ」ト呼ブ事ヲ予ハ山崎博士ニ注意セントス。予ハ西班牙語ヲ解セズト雖モ語學書又辭書ノ示ス處又西班牙語ヲ解スル人ノ意見ヲ問合ス事トセリ。曾テ東京外國語學校教授金澤氏ノ編輯セシ西班牙語ノ會話書ヲ見シ事アリシニ

銀行 El Banco; 銀行家 El Banquero; 預金銀行 El banco de Depósito

トアリシ様記憶ス、コノ書ヲ予ハ今持合サズ。西班牙語ニテ銀行ヲ Banco ト呼ブノ例トシテ Banco de España, Banco de Allacete, Banco de Cartagena, Banco guipuzcoano 等アルハ事實也。

山崎博士ノ云ハル、ガ如ク「バンカ」ノ例ヲ聞カズ。依テ東京外國語學校長村上直次郎氏ノ教ヲ乞ヒシニ村上氏ノ返書中 Banco 及 Banco ノ別ニ就テハ字書ニヨリ調々候。Banco ハ establecimiento トアリ Banca ハ Comercio トアルハ銀行ト其業務トノ別アリト思ハシ又銀行ノ名稱ハ「バンコ」ヲ用フルハ當然ニ候。葡語ハ其辭書ナキ故判然セザル故同様カト考候トナリ。

予ハ葡語ヲ解セズト雖モ實例ニ就テ云ハババンコ (Banco) ノ實例ハ之ヲ見タレドモバンカ (Banca) ノ實例ヲ聞カズ。然レズ Michaelis Dictionario de Lingua Portuguesa E. Allem ナル辭書ハ Banca 及 Banco ナル文字ヲ見ルニ共ニ銀行ヲ意味スル事也此ヲ次ノ如シ

Banca Bank, Wechselbank

Banco Bank Wechselbank

尙 A Dictionary of the Portuguese Language by Alfred Elwes London 1888 ナルニ Banco, bank, bank, seat, bank of sand, stock of money 等ナリ。A New Dictionary of the Portuguese and English Language by H. Michaelis London 1906 ナルニ Banco Bank 等ナリ

尙他ノ辭書ヲ見ルニ

英語 bench; bank 西班牙語 banco 伊太利語 banco, scano 葡萄牙語 banco, mocho baixii.

英語 banker 西班牙語 banquero 獨逸語 Wechsel, Bankier Bankhalter

(Francisco de Almeida-Le Dictionnaire des Six Langues, Lisbon 1902)

千九百七年 Lisbon 出版ノ葡萄牙譯新約聖書ヲ見ルニ馬可傳第十一章第十五章ノ末句ニ
e derribon as mesas dos lampreiros, e as Cadeiras dos que vendiam Porras,

トアリ。

最後伊太利語ニテハ銀行ハ「バンカ」(Banca) 及「バンロ」(Banco) 共ニ使用スル事ナリハ山崎博士ニ注意セントス。双方ノ實例ハコンラードノ國家學字典ニ見ルモ明也。

追録

(二) 予ガ本誌六月號所載拙稿(五)ノ六ノ終リニ極メテ簡略ニ一言述ベ置キシ如ク明治五年八月六日開業セラレタル小野組合銀行ハ我國ニテ實際上始メテ「銀行」ナル文字ヲ使用シテ營業ヲ開始シタルモノ、嚆矢ニシテ、コレ則チ我邦國立銀行條例ノ成立及發布ノ年月即チ明治五年八月及十一月ト全ク同時代ナルノミナラズ、カノ第一國立銀行ノ開業即チ明治六年八月一日ニ先立ツコト正ニ一ヶ年前ナリトス。此史實ハ如何ナル理由ニヤカノ松方侯監修ノ下ニ編纂サレシ彪大ナル明治財政史(コノ書ハ有名ナルモノナレド明治初年ノ部分必ズシモ精確ナラズトノ評ヲ聞ケリ)之ヲ開載セズ。又澁澤男爵ハ銀行發達實歷ニ關シ繰返シ講演サレ居ルニ拘ラズ未ダ嘗テ右一事ヲ明言セラレタルコトナキハ如何ノモノナル乎。前述ノ小野組合銀行ガ本兩替町南側(今日本銀行表門向側ノ邊)ニ於テ明治五年八月六日ヲ以テ夙ニ開業セラレタル史實ニ就テハ予ハ昨年秋季上京ノ際日本橋駿河町三井合名會社內三井家同族會附屬三井家編纂室(今記録掛ト改稱ノ由)ヲ訪問ノ際傳聞セシ處ニシテ該編纂員ノ一員タル文學士遠藤佐々喜氏ハ主トシテ其事業史編纂ヲ分擔シテ數年來研究中ノ由ナレバ此事ノ更ニ詳細ナル真相ハ他日該所ヨリ世ニ發表セラル、コト、信ズ。本誌六月號ニ述ベシ處ヲ茲ニ重テ追録シ讀者ノ注意ヲ促サントス。

追録

(三) 行名又ハ商行ナル用語ニ就テ本誌七月號所載拙稿(其七)十一ノ部ノ追録トシテ茲ニ左ノ事柄ヲ述ベントス。
文學博士橫井時冬先生著雲窓雜載ニ收録サレタル屋號考ニモ引用サレタルガ如ク大寶令ニ

凡市毎肆立標題行名 謂肆者市中陳物處也題行名者假如題標條云絹肆布之類也

トアリ。

古事類苑產業部第二冊產業部二十五商店ノ部ノ第六百四十四頁ニ看板ナル見出ノ下ニ

〔令義解九關市〕 凡市毎肆立標題行名……………

追録

トアルモ同シ。要スルニ「行名」ナル語が既に大寶令中ニアルハ注意スベキ也。

(四) 予が前ニ八月號九月號及十一月號等ニ於テ屢々其說ヲ引用セシ上海稅關ニ在勤ノ山口昇君ヨリ次ノ如キ書狀ヲ八月二十日鹿兒島ニ於テ接手セリコレニヨレバ本文中ニ引用セシ同君ノ說ハ變更訂正ヲ要スルモノ少ナカラズ、今圖ノ報告モ果シテ正シクシテ誤アリキモノナルヤ否ヤ疑問ナシトセズ、サレド兎モ角同君ノ志ニ基キ其說ヲ早ク紹介スベキ筈ナリシガ原稿掲載上ノ順序都合アリテ後ニ廻サレ今マデ遅レタルハ山口君ニ對シテ相濟マヌ次第也茲ニ該書ヲ附シテ左ニ掲載セントス。拜呈前使申上候上海の錢莊に就て其後支那人に依頼し取調候處大分相違の點を發見仕候に付左の如く訂正致度候

滙劃莊(之は錢業會館の組合員に候)

滙劃總會(此の如きもの無之候由に候甚だ疑問に候)

錢業者の機關として

錢業總公所 城内内園南北兩市錢業者の總公所にして特別の事件ありし時集會する由に候

錢行 總務商會内にあり毎月二十六日同業者集會

錢業會館 鐵馬路(北河南路)にあり

北市錢業公所 興仁里にあり毎日北市の兩替相場建つ之れを普通錢行と申し居るが如くに候

南市同上

南市錢行 濟陽里にあり毎日の相場を立つ

別に手形交換所と稱すべきものなく毎日相場立つ處にて(即ち錢行)手形の交換を行ひ居るに非ずと奉存候
尙ほ手形交換に就ては東亞同文會雜誌支那第三卷第十六號「上海錢行に於ける手形交換」に詳記致しあり候 以上

八月十五日

追録

(五) 上海ニ於ケル錢莊組合機關ニ就テ

予が前ニ號ヲ重テ引用紹介シタル上海ニ於ケル錢莊組合諸機關ニ就テノ諸說紛々トシテ一致セザル點アリ予輩親シク同地ニアリテ調査スル能ハザルヲ遺憾トシ上海橫濱正金銀行副支配人山口堅吉氏ニ出書シテ正確ナル調査ヲ依頼シ置キシガ幸ニシテ大正七年十一月十一日附ニテ同氏ヨリ精細ナル報告ニ接セリ而シテ實地調査執筆セシハ同行員タル落久保牛一氏(同氏亞同文書院出身ニテ拙稿(其八)ニ記セシ如ク東亞同文書院教授)ナリト云フ、予ハ山口氏ノ好意ト調査執筆者タル落久保氏眞島君ヲ介シテ落久保氏ノ說ヲ本誌九月號ニ紹介シタル事アリ

ノ努力ニ對シテ茲ニ謹テ感謝ノ意ヲ表シ其調査報告書ナ其儘左ニ引用セントス(七年十一月十七日於長崎)

錢莊間ノ組合機關

上海ニ於ケル錢莊組合機關ニ次ノ四種アリ

一、錢業公所 錢莊間ニ於ケル同業組合ニシテ北市錢業公所及ビ南北兩市錢業總公所ノ二種アリ前者ハ北河南路及ビ文監師路ノ交叉

點二位シ今ヨリ十餘年前時ノ董事陳室郊氏カ舊來山西路ニ在リシ公所ノ基ヲ狹隘ニ過ギシ故チ以テ新ニ此ノ地ニ移轉擴張チ行ヒタルモノニ係リ規模宏莊一見廟宇ノ觀アリ俗ニ之ヲ錢莊會館ト稱ス、但シ會館トハ同鄉人間ノ團結機關ニシテ公所トハ同業者間ノ組合機關ナル本來ノ意義ヨリ論ズレバ錢業公所ナリ指シテ錢莊會館ト呼ブハ甚ダ奇異ノ感ナキニ非ラザレドモ現今コノ兩者ノ區別曖昧ニシテソノ性質會館ニ屬スベキモノモ之ヲ公所ト云ヒ反之ソノ性質公所ニ屬スベキモノモ之ヲ會館ト稱スルコトソノ例他ニ少ナカラズ要スルニ錢業公所ト云ヒ錢莊會館ト云ヒ畢竟同一ノモノニシテ決シテ二公所ニ分立スルモノニ非ラザル也

錢莊會館ハ錢莊間ニ於ケル重要事件ヲ同業相集リテ互ニ協議スル處ニシテ平日ハ門ヲ鎖シテ使用セズ但シソノ内ニ關帝廟ヲ祀リ毎月一日十五日ニ開帳シ有志者ノ禮拜ニ供ヘ又五月及九月ノ十三日ニハ同業者一同相集リテ常會ヲ催シ酒筵ヲ設ケ看戲ノ歡ヲ盡スナ例トス、後者乃チ南北錢業總公所ハ城內内園ニ在リ毎年舊曆正月十三日大會ヲ開キ總董ノ選舉チ行ヒ全市錢業公共ノ事項ヲ協議ス尙對外交涉等緊要事件ノ發生スル場合ニハ隨時コノ處ニ於テ南北合同大會ヲ催ス例ナレドモ平日ハ門ヲ閉シテ出入ナク中ニ城隍廟ヲ安置シ人ノ禮拜ニ供ス

二、錢行 錢莊間ニ於ケル交易機關ニシテ南北兩市ニ夫々一ヶ所アリ、北市錢行ハ寧波路與仁里二位シ規模廣潤數百人ヲ容ルルニ足ル毎日早朝及正午過ぎ各錢莊手代此處ニ相集リテ錢市ヲ建テ又弗銀等ノ賣買チ行フ南市錢行ハ南市新碼頭濟陽里ニ在リソノ性質同シテ同業者間ノ交易場タリ

茲ニ注意スベキハ上海ニ於ケル百數十個ノ錢莊中南市ニ在ルモノハ僅ニ二十四五軒ニ過ギズソノ餘ノ大部ハ總テ北市ニ屬シ從ツテソノ勢力亦北市ニ集中セラレ單ニ錢行ト稱スル時ハ則チ北市錢行ヲ意味ス、人或ハ南市ニテ南市錢業公所ノ存スルガ如ク誤クモノアレドモ之レ公所ト錢行トヲ混同シタルモノニシテ南市ニハ從來錢行ノ外公所ナルモノ無ク必要ノ際ニハ隨時錢行內ニ於テ協議チ行フモノトス

三、匯劃總會 錢莊間ニ於ケル一種ノ手形交換チ行フ組合ノ名稱ニシテ毎日午後錢行內ニ於テ開始セラレ

四、錢業公會 總商會ノ樓上ニ在リ、從前錢業會商處ト稱セラレシモノニシテ昨年正月ヨリ錢業公會ト改名セラレタリ、其ノ目的專ラ同業ヲ聯絡シ團結シ強固ニシ以テ內ハ營業ノ發展ヲ計リ爭議ノ調停ニ力メ外ハ同業ヲ代表シテ交涉ニ當リ非法ノ侵害ヲ免レシムルニ在リ毎月二日及十六日ニ定會ヲ開クノ外必要ニ應ジ隨時此處ニ集會協議スルモノトス

之ヲ要スルニ錢業公所ハ同業者間ノ捐金ヲ以テ設立サレタル一種ノ集會所又ハ廟宇ノ如キモノニシテ平時ハ同業者ノ參拜ニ供シ一旦有事ノ際同業全體ノ大會ヲ開クノ用アル外更ニ錢莊間ノ活動機關トシテ見ルベキモノ無シ反之錢行及ビ匯劃總會ハ毎日朝夕缺クコト無ク開始サレ營業上ノ活動機關トシテ最も重要ナルモノニ屬ス更ニ昨年總商會內ニ錢業公會ヲ開設シ營業上ノ諸規則ヲ制定セシ以來內ハ同業者間商事上ノ事件ハ勿論外宣邊ソノ他ニ對スル交涉事件ニ至ルマデ事大小トナクコノ處ニ於テ協議決行セラル、ニ至リ錢莊同業組合モ漸ク舊慣ヲ脱シソノ面目ヲ改メントスル誠ニ時勢ノ推移ト共ニ當然ノ事ト云フベシ (完結)

正誤

本誌前號所載拙稿(其九)中最後ノ頁(一一七頁)ニ英學字典 (English and Chinese Dictionary) トアルハ英學字典 (English and Chinese Dictionary) ノ誤